

DG Flugzeugbau GmbH



なんで私がグライダーを作るハメになったのか

「ヴォルフさん、私とは長い付き合いでしょ。賛成するとでも思ったの？
こんな計画からはすぐ手を引くべきよ！」

1996年5月、文字通り五月晴れの日だった。パートナーでもある専属会計士のヴォルフ夫妻との食事の後、女房がいった言葉は偽りのない気持ちを表していた。今ではブリュヒザールにあるDG社の代表取締役ということになってしまったが、始まりはこんな具合だった。まさしく晴天の霹靂というにふさわしいそのいきさつを、このホームページを見てくださっている皆さんにお話しようと思う。

6年以上も前のことだ。私は自分でDG-400を持っており、ひまさえあればそれに乗っていた。DG-400を私は特別に気に入っていたが、ストレスなしに滑空できることは快適そのものだった。アウトランディングも怖かったし“すりばち”から外へ飛び出すことなんかは考えても見なかった。というのも当時の私は滑空それ自体の面白さにハマっており、競技会で入賞することとか、様々な滑空記録で上位にランクされたりすることとかにはあんまり興味はなかったからだ。

うまくなってくると欲が出てきた。もっと新しい、もっとかっこいいグライダーが

ほしくなったのだ。同じクラスで現行の機体を探してみたら、どうも **DG-800B** がよさそうだという結論に達した。そのとたんにブリュヒザールまで直接行ってしまった。あれこれ交渉し、契約書を交わす段になって気が付いたのだが、販売担当者はちっとも急ごうとしないし、周りも嬉しそうじゃない。確信は持てないものの、この会社は長くはないのではないかという気がした。

グライダー三昧の休暇を過ごそうと南フランスのヴィノンへ出かけたのが 96 年の 3 月だった。そのときこの会社が倒産したとのニュースが届けられた。予感があったとはいえ、楽しみにしていた上級機の夢は吹っ飛んだわけだ。気に入ってるけど同じ **DG-400** での滑空を続けなきゃいけないわけで、シラケてしまったね。

その後 5 月になって、最初に話した専属会計士のヴォルフとの食事の折にこの話をして、シラケの原因を話すと、彼はこともなげに言ってくれた。「わけないじゃないか。会社ごと買ってしまえよ！」と。それに対する答えが、はじめに書いた女房の言葉というわけだ。

ヴォルフと私は、20 年来共同で多くの会社を経営してきており、**DG** 社買収の件に関してはお互いの考えは一致しており、何度検討しても変わりはない。後には女房も賛成してくれることになるのだが、高性能の製品を野垂れ死にさせてしまうことなんかとてもじゃないができればしない。結局一週間後、ヴォルフと私はブリュヒザールへ飛び、グラマー氏と株式譲渡の交渉に入った。債権者たちによって何もかも持ち出されて、床や鉄骨が剥き出しになった工場の一角だった。

経験からして事態は容易ならざることには明らかったが、それだけにむしろ資金さえ十分ならば将来は明るいはずという信念は揺らぐことはなかった。

DG 800 をはじめとする製品群はテクノロジーの塊であり、卓越したアイデアに満

ちていた。こんな製品を荒れ放題の工場に放置し、日の目を見させないことは恥ずかしいことだ。グラーサー・ダークス+エラン、つまりD G航空機製作所は、かつて世界で三本の指に入るといわれたグライダーメーカーではなかったのか。

ところでゲルハルト・ヴォルフは、その時まで私の趣味には何の関心も持っていなかったが、共同経営者としてこの社に加わってからは、結構こだわりを示すようになってきた。

さて、グライダー生産を再開してから 5 ヶ月が経過した。私たちは前にもましてグライダー事業の展望に確信を深めている。勿論それは従業員全員、ならびに納入業者の努力のおかげであり、こよなく滑空を愛する顧客の皆様、およびグライダーパイロットの方々に支えられている。「明日へ向かって飛べ！」を合言葉に、更なる前進を果たさなければならないと思っている。

もう一度女房の言葉に戻ることになるが、それは私の仕事の足を引っ張ろうというものでは当然なかった。今ではもう何度もここブリュヒザールに足を運んでおり、グライダー開発にも積極的に意見を言うようになってきている。先日もスタッフに「まだこの件で考えがあるのなら、いつでも受けて立つわよ！」といていた。剣幕だけはあの5月のころと変わりない。

それゆえに、女房はわが社の共同経営者としては欠かせない存在だ。

K.F.ヴェーバー 1996年10月記

日本語訳：安間宏見



DG 航空機製作所が倒産するって？

DG 社の生産が軌道に乗って六ヶ月が経つというのに、信じがたいうわさが流れている。他社のグライダーを買おうとしているクラブが、DG 社は倒産寸前だと聞いたと言うのだ。

誰がこんな愚にもつかないうわさを流しているのか？

もっとも、次の事実を話せば安心してもらえるだろう。

DG 航空機製作所は、1996 年 5 月の再建以来：

- ▶ このクラスでは先進のリトラクタブル・エンジンを搭載した **DG-800B** 型機を開発・生産しており、
- ▶ 同機はこのクラスのトップセラーの地位を確保してきており、
- ▶ 更に、従来以上に完成され革新的な **DG-1000** 型機が開発・生産されて、
- ▶ 製品ラインナップも充実し、
- ▶ 従業員も 17 人から 63 人に増員を果たし、
- ▶ オーナーの資金力により、すべてのグライダーメーカーの中でも最も優れた財政基盤を備えるに至っている。

他に何か質問はあるだろうか？

これでもう根も葉もない噂を信じなくなることを願っている。

皆さんはここまで読んでくださったし、今もこれを読んでくださっている。

さらに当社が事業を継続している限り、今後何年もこれを読むことになるに違いない。

その都度私が正しかったことをわかってもらえるはずだ。



- K.F.ヴェーバー 2001年12月記

日本語訳：安間宏見



引き継ぐ世代

親として喜ばしいことは、子供が事業を引き継いでくれることだ。

私の長女のアンチュは、すでにこの会社とは関わりをもっていた。1997年から1998年にかけてまだ学生だったころ長期休暇中はいつも私たちと働いており、品質保証部門を担当していた。

経営課程の資格を修得後3年間は、ドイツの某大手コンサルタント会社で彼女は働いていた。2001年1月5日からはブリュヒザールの本社で社長代理の職務を果たしている。今後は、たとえば私がここから400km離れたビーレフェルトの自宅にいて留守のときは、彼女が私の代わりに勤めることになる。

責任者が常にその場において日々の職務を切れ目なく遂行することが組織として重要な

ことだと、私は確信している。

というわけで、電話に出た声が「ヴェーバーです」と答えても、それが若々しい声だったら、私ではないことになる。

だからといって、心配する必要はまったくない。次の世代がもう準備をはじめているということは、今のあなたが安心できるばかりでなく、将来にわたって顧客が安心できることに繋がると、私は断言できる。



「おかけになる時は、音声にご注意ください！」

...なんちゃってね。実は電話の件だが、もう心配はなくなってしまった。つまり、ヴェーバーと返事されても、私本人がどうか悩まなくてもよくなったんだ。娘が私の見習いをしていると報告してきたが、会社の細かいところを知るためには彼女はどうしても現場に出る必要があったわけだ。で、それが元で、去年の終わりには苗字が変わる事態になった。お相手は、当社のデザイン・エンジニアのスヴェン・リーネール...
これで一件落着。

この新婚の二人はもちろん祝福されていて、両親ばかりでなく、DG 全関係者が大喜びだ。



というわけで、二人の新メールアドレスは、lehner.antje@dg-flugzeugbau.deと
lehner.swen@dg-flugzeugbau.de。



K.F.ヴェーバー 2002年12月30日記

日本語訳：安間宏見

DG 航空機製作所オーナー・プロフィール

| | | |
|--|------------------------------------|---------------------------------------|
| <p>カール・フリートリッヒ・ ヴェーバー 代表取締役</p> | <p>エヴァ・マリア・ ヴェーバー</p> | <p>ゲルハルト・ ヴォルフ</p> |
| <p>1946年生、既婚、3児</p> | <p>1946年生、既婚、 3児</p> | <p>1945年生、既婚、2児</p> |
| <p>経営監理の修士号を有し、 ビーレフェルトでソフトウェア会 社を経営</p> | <p>主婦 全従業員の母 新工場共同オーナー</p> | <p>企業会計の修士号を有し、 ビーレフェルトで会社を経営</p> |
| <p>1982 滑空機及び動力滑空機免許取得 1991-1996 DG-400 所有</p> | <p>地球の上に 両足で立つこと</p> | <p>健康上の理由により 飛行は避けている</p> |
| | | |

この翻訳を他に引用される場合は、出典を明らかにしていただくよう、お願いいたします